宗教からみる現代人と宗教性

――非合理のなかにある大切なもの

東北大学　大村哲夫

現代人は「合理的」？

私たち現代人は、宇宙へロケットを飛ばし、人の寿命を延ばし、遺伝情報すら操作可能な時代に生きています。人間はいわば「神」の領域にまで手を延ばすようになりました。情報はインターネットを通して瞬時に行き交い、世界には「秘密」や「神秘」が存在しにくくなりました。こうした科学的な生活をおくる私たちの「こころ」は、いつも合理的に働き判断しているでしょうか？　宗教は意味を失ったのでしょうか？

私は「宗教学」や「宗教心理学」、「臨床死生学」を専門とし、また僧侶や牧師、神職などの宗教者を病院や福祉施設、被災地などで活動できる公共性をもった「臨床宗教師」として養成する研修も行っています。本稿では、宗教は「こうあるべき」といった実態の乏しい固定した「教義」を論じるのではなく、現代人の生きる「現象」としてみる立場で考えてみたいと思います。

死児と「卒業証書」

私の研究テーマの一つは、東日本大震災で非業の死を遂げた幼児・児童・生徒の死を、各学校がどのように「受容」しようとしているのか、ということです。犠牲のあった公立の学校・園に調査を行ったところ、慰霊碑を建てたり、追悼集会を開いたりするほか、死亡して学籍を喪失した子どもにも卒業証書を授与している学校が少なくないことがわかりました。震災直後だけではなくその後毎年、二〇一六年三月にも授与がありました。震災発生時小学一年生だった児童が、生きていたら卒業学年となるため授与が行われたのです。

亡くなった子どもを象徴する地蔵たち　青森　川倉地蔵堂　筆者撮影

調査結果から、これらの授与は遺族からではなく学校側からの打診によって行われており、「死んだ子どもも一緒に卒業させたい」という教員らの願いが主たる動機でした。卒業証書授与という行為の中には、死児の供養のため石地蔵を建て、「死んだ子の歳を数え」つつ、その年齢に応じた学用品や玩具などを供える民間信仰の心性と共通するものがあることがわかります。

私は、死児への卒業証書授与とは、憲法や教育基本法によって「宗教的活動」が禁止されている公立学校において、宗教儀礼に代わって行われる「慰霊」の儀礼であると考えています。こうした行為が行われるということは、死児に「たましい」が存在し、慰めうること、そうすることによって生き残った人たちが癒やされることなどが関係者の間に共通理解されているからと考えることができます。そして死児への卒業証書授与が東北に限らず普遍性をもつことは、いじめや犯罪、事故や病気で亡くなった子どもたちに全国的に実施されていることからもわかります。また海外の研究者に情報を求めたところ、北米などでも同様の事例が存在することがわかりました。

「非合理」と「こころ」

死んだ人の「たましい」が存在するかどうか、は合理的に証明することはできません。法律で定められた文書である卒業証書を、学籍を喪失した死児に授与することも合理的とは言えません。しかし、その行為に込められた関係者の悲嘆と、何とかしてあげたい、せずにはおれない、という心情には深く共感できるものがあります。

各種世論調査によると、宗教を信じる日本人は二〇％程度、約八〇％の人は宗教を信じないと答えています。しかしその反面、お墓参りをする人は八〇％、初詣などをする人も七〇％を超えています。このことは何を意味するのでしょうか。

私は、多くの日本人は組織的な宗教集団に帰属している意識はないものの、死後のたましいの存続や宗教的存在への畏敬の念などは無意識に持ち合わせていると考えています。墓石とその中にある遺骨の一部に、「〇〇さん、安らかにお眠りください。私たちのことを見守ってください」と祈ることには、合理性はなく、具体的な効果（「ご利益（りやく）」）も期待できないでしょう。しかしそこには、たとえ生死が別れても、死者との結びつきを生前同様なお大切なものとする心情が存在していることは間違いありません。「宗教」と聞くと違和感や嫌悪感を感じる人も、広い意味での「宗教性」は持ち合わせているのです。

人の非合理行動の中にあるもの

私たちは、受験が間近になると天神さまにお参りをし、宝くじを買うときはかつて大当たりが出た売場を意識したりします。ラグビーの五郎丸や大相撲の琴奨菊がここ一番という局面で、「ルーティン」と呼ばれる独特のポーズをとることも話題になりました。私たちも、何かことを行う時、カラスが鳴いたり、茶柱が立ったり、夢見の善し悪しなどのジンクスを気にしたり、占いを見たり、「勝負服」を着たり「勝負グッズ」を持ち込んだりします。スピリチュアルスポットを訪れ、「パワー」をもらう人もいるでしょう。科学万能の時代に生きる私たちは、なぜか大切な局面で非合理な行動をとるのです。言い換えれば、私たちが非合理な行動をとるときには、そこに何か心理的に深い意味が込められているということに他なりません。圧倒的な無力感の中で現実を直接変えることはできなくても祈らずにはおれず、「聖地」を訪れることで力を感じ、神仏を信じるわけではなくても大自然の神秘に心をうたれ、身心が清められたと感じるなど、私たちは幅広い宗教、すなわち宗教性ゆたかな生を送っています。世界で問題となっている宗教の名を借りた暴力や原理主義だけが宗教ではありません。特定の宗派教団への帰属や教義にこだわるのではなく、多くの人が感じ共有する宗教性こそ、人間らしい生き方の根柢にあるものと言えるのではないでしょうか。

私は心理臨床の場で、宗教を信じる、信じないといった二分法でクライエントをみるのではなく、クライエントの無意識に行う非合理な行動や宗教的行動に込められた意味を読み解くことを大切にしたいと考えています。

●文　献

松島公望・川島大輔・西脇　良編（二〇一六）『宗教を心理学する――データから見えてくる日本人の宗教性』誠信書房

滝口俊子監修、大村哲夫・佐藤雅明編（二〇一五）『心理臨床とセラピストの人生』創元社